巻　頭　言

国際経営研究所所長　　海老澤　栄　一

極暑が続いている。気象庁の観測始まって以来の高温、というテレビの気象解説が毎日のように繰り返される。毎日聴いていると、その異常さに次第に慣れてきて、「またかあ」という感じになる。つまり異常化の正常化であり、そこには慣れの怖さが潜んでいる。

昨日まで経験したと同じことが今日もおそらく起こり、明日も起こるであろうという予測をたてることが、次第に困難になってきているように思う。また個人の意思や行動とは関係なく、世界中の複雑な現象が何の前触れもなく突然眼前に現れることが頻繁に起こっているようにもみえる。個人生活や地域社会、企業経営などでも時間と空間の違いが縮まり、オープンな環境での予告なしの判断や行動が日常的に展開されるようになってきた。

今回お届けする『国際経営フォーラム』では、研究論文７本、共同研究報告３本、教育報告書１本、合計11本の原稿を上程した。研究論文７本のうち４本は特集に関係する内容になっている。特集は“グローバル社会との接点－環境・企業・価値の複合化－”とした。オープンな環境と密接な関係にあると思われるグローバル社会のテーマを意識した特集論文に限り、その概要をみておこう。海老澤論文「グローバル化社会の光と影－ヒトの役割からみた景観図式－」は、グローバル社会をマクロの視点からとらえ、自然界と人間界との接点を考察対象にしている。特集副題の環境・企業・価値の複合化が意識されている。次に小島論文「新しい株式会社制度の創設－資本主義と法人制度の嘘からはじまる新経営学－」では、社会システムの枠のなかでの経営学という問題意識をもつ。かつ“資本主義と法人制度の嘘”という大胆で、ある意味では衝撃的な話題が提供される。

さらに田中論文「企業のグローバル化戦略ーものづくりの国際経営ー」では、ものづくりに限定してその領域がグローバルに展開される過程を国際経営の視点でとらえる。本特集の本流とでもいうべき内容になっている。４つめの畑中論文「曖昧とグローバル環境ー『曖昧』と『YES・NO』による経営の一考察ー」は、西洋と東洋との文化特性比較から、経営あるいは戦略問題を説き起こそうとする。具体的には、一神教ー多神教、YES・NO（明確）ー曖昧、形式知ー曖昧知が代表的な分析軸として登場する。

グローバル化時代に視野が狭くなることはタブーである。虫の目の他に鳥の目、顕微鏡のほかに望遠鏡をもつことが肝要であろう。P. Sengeの著のなかに、“他のヒトの目をとおして現実を観察する”(Seeing Reality Through Others' Eyes) の章見出しがあった。随分虫のいい話かもしれない。しかし冷静に考えてみると、目を貸し借り、いや協働センサーの対象にすれば、視野がかなり広域になることは間違いないであろう。智恵も貸し借りの対象にすれば、単独の智恵よりもかなり広域性、異質性が高まることが期待できる。目でも智恵でも借りたり貸したりしてくれる仲間がいるということは、ある意味で社会的機能を果たしているということにもなる。

限定された空間に安住することは、慣れを助長する。そしてその慣れは、人間の感覚を麻痺させ、ときに思考や行動を怠惰にする。ある意味で、自己満足を助長する側面もある。このことが自己の考えや意識と異なる情報やヒトを遠ざけたり、自己の考えに相手を強引に合わさせたりする行動となって現出する。グローバル化時代のクローズド化現象ともいえる動きである。

個人も企業も社会も国も、“間”や“際”、あるいは“協”を意識して、“助け合うこと、共に仕事をすること”を言動に組み込むことが、グローバル化時代に求められているのではないだろうか。少なくとも自我のためのグローバル化は、その範に違反しているように思える。本誌がグローバルとは何か、を考えるときのささやかな話題提供になれば幸いである。